

## 広瀬旭荘の題画詩「題春川釣魚図」の手法

―楽府詩「枯魚過河泣」と『莊子』の寓喩―

月 野 文 子

### 一

天保十四年（一八四三）夏、広瀬旭荘が大阪を引き払って江戸へ出たのは、大名家へ召し抱えられんことを期したためと思われる。これまでのように京阪を活動の拠点としていたのでは、いくら名をあげたところで、諸侯に接する機会は無いに等しい。仕官とまではいかなくとも、客分として遇され、藩主の前で講学することも日本中の大名があつまる江戸でなら可能であった。旭荘は天保八年にも二ヶ月半ほど江戸に滞在したが、この時に、羽倉簡堂（注1）の紹介で林氏をはじめとする幕府の儒官たちと詩会で同席する機会も得ている。また、館柳湾や安積良斎らとも会っている。

名士や貴顕に交わったことにより、何か手応えのようなものを感じていたのだろう。この点について鈴木瑞枝氏は、旭荘の書簡と兄淡窓の日記の記事をも検討した上で、「水野忠邦が、旭荘を召し抱えようと考え、その意を受けた羽倉簡堂が、彼を呼び寄せた」とみる。（注2）程なく水野と羽倉は罷免されて天保改革は頓挫してしまいが、旭荘は江戸に止まることを決意する。

天保十四年十二月、旭荘は大名や旗本の屋敷が並ぶ浜町の一隅（久松丁）に屋敷を買い、（注3）住み込みの塾生も何人か手許に置く生活を始めた。さらに下僕と女中も置くようになる。当時の江戸では、在野の学者が私塾を開いたところで、その月謝だけでは体面を保って暮らしていくのはか

なり困難なことであつたが、旭莊の場合は比較的好調なすべり出しだったらしい。旭莊の日記『日間瑣事備忘録』（以下『瑣事録』）をみると、江戸での旭莊が多くの人士と積極的に接しようとしていたことがわかる。旭莊の評判を耳にした諸藩の武士や詩文を愛好する医師らも多く訪れ、彼らに招かれて出向くこともしばしばであつた。また、銭湯や床屋に日をあけずに通つて身だしなみを整え、何時、誰と面会してもよいような心構えをしていた。旭莊がこのように在野の学者としては贅沢とも思える暮らしを続けたのは、やはり、彼が思い描く「学者」としての矜持を守るためだったと同時に、仕官を念頭においての行動だったのだらう。そのために出費がかさみ、さらには妻女の死と盗難事件も重なつて、結局は莫大な借金を背負つて江戸を引き払うことになるのである。

本稿では、旭莊が浜町に居を構えて間もない頃の作品「題春川釣魚図」詩（『梅墩詩鈔』第三篇の卷三に）における寓喩の手法とそこに込められた意図を探り、旭莊の江戸での活動の意味を考える資としたい。

『梅墩詩鈔』の第一編卷一から第三編卷三までの全九巻のうちで、題面詩であることを明記しているのは二十首ほどであるが、その中で当該詩は最も長く、また、最も旭莊作品の特徴を表していると思われるものである。詩は七言

古詩のかたちをとる四十二句の長篇であるにもかかわらず換韻をせずに、魚韻と虞韻とで通韻して一篇をまとめ上げている。まず、詩を一瞥しておこう。なお、『詩鈔』刊本の返り点に従つて私に書き下した文を添えるが、上段の本文は、可能な限り忠実に刊本の字体を使用した。字体の不統一はそのためである。

#### 題春川釣魚圖

春川釣魚圖に題す

春雲知晴次第逋

春雲は晴を知りて次第に逋<sup>のが</sup>れ

雲際春樹澹欲無

雲際の春樹は澹<sup>あは</sup>くして無ならんと欲す

南澗昨夜一簑雨

南澗 昨夜一簑の雨

萬點桃花逐水徂

萬點の桃花 水を逐ひて徂<sup>ゆ</sup>く

新漲森森連遠草

新漲は森森として遠く草を連ね

中有扁舟載老漁

中に扁舟の老漁を載する有り

長竿嫖似微風觸

長竿嫖として微風觸るるに似たり

弱綸搖曳縮又舒

弱綸は搖ぎて曳かれ縮み又舒<sup>の</sup>ぶ

大魚見機決然逝

大魚は機を見て決然として逝くも

小魚見餌忽踟躕

小魚は餌を見て忽ち踟躕す

初則相疑不肯近

初めは則ち相疑ひて近づくを肯ぜず

終難自持一口鮪

終ひに自ら持すこと難く一口鮪<sup>ぶく</sup>む

魚尾離水三四寸

魚尾水を離るること三四寸

掉頭打綸刺潑如

頭を掉<sup>ふ</sup>ひ綸<sup>いと</sup>を打ち刺潑如たり

曲鉤入吮悔何益

曲鉤吮<sup>のど</sup>に入り悔ゆるも何の益かあらん

口猶含餌身已誅  
殘鱗漂浪耿無采  
遺魂絳藻奄不蘇  
嗚呼

口に猶ほ餌を含みて身は已に誅せらる  
殘鱗は浪に漂ひて耿として采無く  
遺魂は藻に絳<sup>か</sup>りて奄<sup>としま</sup>るも蘇らず  
嗚呼<sup>ああ</sup>

前魚已如是如何  
後魚慕餌復相趨

前魚の已に是の如きは如何せん  
後魚餌を慕ひて復た相趨く

此圖寓戒炳如鑑  
為魚可哀釣可娛

此の圖戒を寓して炳かなること鑑の如し  
魚の為には哀れむべきも釣りは娛むべし

吾人元是山中客

吾人は元是れ山中の客

數椽竹屋面溪居

數椽の竹屋 溪に面して居る

一邱一壑心所適

一邱一壑 心の適ふ所

出手釣竿入手書

出でて釣竿を手にし入りて書を手にす

一念自誤非人註

一念自ら誤りて人の註<sup>あざむ</sup>くにあらず

遠去小園客大都

遠く小園を去り大都に客す

利餌名鉤世波際

利餌 名鉤 世波の際

不知我身化為魚

知らず 我が身化して魚と為るを

桂玉重債新居簞

桂玉は債を重ねて新居は簞<sup>まづ</sup>しく

猿鶴結怨故交踈

猿鶴は怨みを結びて故交踈し

朝趨公門望塵拜

朝に公門に趨きて塵を望んで拝し

夕歸燈下獨長吁

夕に燈下に歸りて獨り長吁す

縱令良媒通彼美

縱<sup>たと</sup>令ひ良媒彼の美に通ぜんも

奈我才拙而謀迂

我が才拙くして謀の迂なるを奈<sup>いか</sup>せん

時有一二新識在  
詩酒開社與我俱  
亦如蹄涔稍將涸  
彼此相依互啣嚙  
覲顏紅塵百尺下  
對此春川釣魚圖

時に一二の新識在る有り  
詩酒 社を開くこと我と俱にす  
亦た蹄涔<sup>ようや</sup>稍く將に涸れんとするが如く  
彼此 相依りて互に啣嚙す  
覲顏 紅塵百尺の下  
此の春川釣魚圖に對す

### 【語釈】

○一簞雨——張志和の「漁父」にある句を下敷きにして、  
簞が必要なほどの雨をいうか。絵画においても簞と笠  
は漁翁の必需品として描かれる。○大魚小魚——大人  
と小人を比喻する。○機——釣り針の仕掛け ○跼蹐——  
躊躇におなじ。○刺潑如——刺潑は澆刺に同じ。魚の  
勢いよく躍るさま。如は語調をととのえる助字。○  
桂玉——物価の高い喩え。桂玉之艱<sup>い</sup>他国で桂よりも高  
い薪と玉よりも高い食とで暮らす苦しみ。○猿鶴——  
周の穆王が南征したとき一軍が皆化して君子は猿鶴と  
なり小人は沙蟲となった故事から、戦死した君子の称。  
それをふまえ、才德のあるかつての仲間が本性を失っ  
ているさまをいう。○結怨——怨みあう関係を結ぶ。  
敵対関係を生じる。○公門——諸侯の邸第の門。○  
望塵——遠くから後塵を拝す意。権力者におもねる。  
○美——美人（すぐれた人物）。君主の喩。○蹄涔——

牛馬の足跡にたまった水。○咆嘯——咆濡に同じ。水からあげられた魚が互いに沫を吹き出して潤し合うこと。狭い世界に齷齪して俗生活を営む喩え。『莊子』にもとづく。○靦顏——恥じ入る顔。○紅塵——賑やかな街のほこり。煩わしい俗世間。(通釈は本稿の末尾に付す。)

## 二

まず、当該詩の制作時の事情を探っておこう。当該詩を収める『詩鈔』の第三篇卷三は、江戸在住時の作品(天保十四年五月、弘化二年十二月)の巻である。この期間の『瑣事録』を閲すると、天保十五年二月十六日条に、

賦題「春川釣魚圖」七古贈「諸柳橋」加藤善庵別號以下倣

此

とあって、「題春川釣魚圖」詩は柳橋こと加藤善庵に贈った七言古詩であることがわかる。また、二日後の二月十八日には当該詩に答えた善庵の七言絶句が届いたことが記され、その下に割り書きのかたちで善庵の詩

落手新詩讀「幾回」慨然寄托見「英才」

巨鼈吞「餌有」天意」永賦田園歸去來

が書き込まれている。

加藤善庵は医師で、旭莊と親交のあった鈴木春山を介し

て知り合った人物である。『瑣事録』の記すところによれば、旭莊と善庵はこれに先立つ一月二十一日に、鈴木春山によって引き合わされた。その前日、善庵の方から春山に、旭莊を招待したい由を伝えて、仲立ちを依頼してきたらしい。<sup>〔注6〕</sup>旭莊と善庵はその日のうちに意気投合して、善庵の発案で詩社をつくる相談がまとまったことも記されている。毎月十四日と二十九日に詩会を開くことも決めたらしい。<sup>〔注7〕</sup>善庵の人と為りについて一月二十一日の『瑣事録』は

善庵年五十五六、容貌魁梧、言談如「流」、少學「大田錦城著柳橋詩話」、詩文甲「醫林」

と記している。初対面であるから「詩文は醫林に甲たり」(医師仲間随一の詩人)というのは、春山の事前のコメントによるものであろうが、旭莊が善庵に惹かれたのは事実である。それ故に、力を込めた長篇古詩を賦して贈ったのである。当該詩の賦された前後の『瑣事録』の記述を調べてみると、この二日前の二月十四日に旭莊が加藤善庵の家で開かれた詩会に赴いている。この時に何か当該詩を善庵に贈るきっかけになるような事情が発生したのかもしれない。画中には桃花が描かれており、季節的にも相応しいことから、この春川釣魚圖が善庵の家に飾られていたものと考えてよいだろう。或は当日の詩会がこの絵画を題としたものであったかもしれない。

さて、作品のもととなった「釣魚図」について考えてみよう。旭莊が当該詩を題した絵画「春川釣魚図」が如何なるものであったか詳らかではないが、釣魚図の基本的な構図は、山水の風景の中に点景として描かれる人物が舟中で静かに釣り糸を垂れる、というものである。或いは、釣便図<sup>注8</sup>か太公望図のように、釣り人を少しクローズアップした構図とも考えられるが、旭莊の詩には冒頭で遠景が細かく描かれていることから、前者とみてよいのだろう。画題として当時好まれていた武陵桃源図を意識して描かれた図のようでもある。季節が限定されているところから、襖絵ではなくて、屏風か掛幅に仕立てられたものであったと思われる。

ここで確認しておきたいのは、山水画中に描かれた釣り人が詩の題材となり得る理由である。自然の風景と一体化して無心に釣りを楽しむ人物、つまり「漁翁」——当該詩では押韻の都合上「老漁」——は隠逸者の暗喩として登場する。その思想は既に『楚辞』の「漁父」や『莊子』雑篇の「漁父」、或いは太公望呂尚によって具現されている。

柳宗元の詩「漁翁」が、自然の中にとけ込んで暮らす漁翁のすがたをみつめて心の自由をうたうのも、漁翁が隠逸の象徴という考え方が浸透していたからである。江湖山人と号して松江のほとりで生活した陸龜蒙、煙波釣徒と自称し

「漁父」の詩を作って周辺の山水を絵に画いたという張志和、彼らの行動は封建社会の枠から外れた自由な境遇の象徴としての漁翁への憧れを実践したものに他ならない。

ところで、題画詩や画賛のごときものは詩画一致をめざすものであつて、画中の詩情を味わうための一助として機能させなければ意味がない。画中の詩的イメージと、画面上には描かれていない思想的背景をどこまで読み取っているか、さらには、それをどのように言葉に置き換えているか、画の題材がポピュラーなものほど着眼の方法が問われる。むろん、画の巧みさも詠まねばならないが、山水画に描かれる風景は現実を写したものではない。象徴的な心象風景である。したがって、画の思想への理解こそが重要なのである。描かれた風景の中に身を置くこと、つまり、点景として描かれた人物と画面の中で同化することによってリアリティを醸し出す表現も可能となる。

詩人が描かれた世界に共感しそれを詩に表現する上で、もっとも同化しやすいのが「隠逸」的生活を送る人物であり、象徴的にその要素をもつ「漁翁」である。孤高をたもつて自適する漁翁は、文人の理想だからである。それは同時に、文人画に描かれる題材として、山水と漁翁は最もありふれたものであることを意味する。文人画、山水画のピークを越えた江戸末期、題画詩の表現は繰り返されて陳腐と

なり、誰が詠んでも変り映えしないものとなりつつあった。  
なお、『詩鈔』には当該詩の次に左のような七言絶句を載せる。

### 畫

遠舵殘雲幾片餘

舵を遶る殘雲は幾片をか餘す

春江一帶雨晴初

春江一帶 雨晴るるの初

東風動捲釣絲去

東風動もすれば釣り糸を捲き去る

多恐漁翁不得魚

多<sup>ただ</sup>恐る 漁翁の魚を得ざるを

これも題画詩で、河辺一帶の春景色を詠む。春江、雨上りの殘雲と舟（舵を遶る殘雲）、春風に揺れる釣り竿や糸など、題材とした絵画の構図はまったく同じであることが読み取れる。これが「春川釣魚図」に題した本来の詩だったのではあるまいか。『瑣事録』に此の絶句にかかわる記述はみえないが、長篇古詩とこの絶句の二首が、同一の絵画をもとにしてほぼ同時期に作られたものであることは疑いがない。むしろ、題画詩の有りようとしてはこちらの方が一般的であることから考えれば、こちらの絶句が先にできていたのだろう。詩の世界では「漁翁」は本来、魚が釣れようが釣れまいが、気にも止めずに釣り糸を垂れる、という設定が普通である。それをこの絶句が釣果を危ぶんでいるのは、画中の漁翁を、渭水で釣り糸を垂れて周の文王に見出された太公望呂尚に見立てたからであろうか。善庵が

大田錦城に傾倒していたことは、先に引用した『瑣事録』の記事にもみえるが、この大田錦城が寛政の改革で登用された朱子学者柴野栗山を揶揄する詩を作り、「窮理為<sup>レ</sup>餌持<sup>二</sup>敬縉<sup>一</sup>、釣<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>経筵侍講<sup>二</sup>後<sup>一</sup>」としているのも気になるところである。

詩会当日、旭莊が上述の七言絶句を詠み、作品を比評し合ううちに話が太田錦城の詩に及び、それが切っ掛けとなつて、旭莊が当該の長篇古詩を賦したのだとすれば納得がいく。ありきたりの題材で、類似の先行作も多いからこそ、旭莊としては、既成の型に嵌まった表現は、医師仲間で随一と評される善庵に対しては是が非でも避けたいところだったろう。

なお、善庵から寄せられた詩には「巨鼈の餌を吞むは天意有り」とある。釣る側ではなくて、釣られる側が主体となっていることから、長篇の七言古詩の方に応えたものであることは間違いない。善庵の絶句の趣旨は「小魚ならぬ巨鼈——偉大な旭莊先生——が餌を吞む（仕官する）ことは天の意志です。あなたは故郷を思つて、陶淵明の帰去来の辞を永くうたい続けることになるでしょう」である。長篇の力作に対する答えとしては素っ気なかったと言わざるを得ない。通り一遍の社交辞令に近い七言絶句に、旭莊は少し気をそがれたのかもしれない。旭莊の善庵に対する評価は

次第に凋んでいったのか、善庵が多忙であったのか、約束の詩会すら定期的には開かれなくなってしまうようである。

### 三

旭莊の当該詩はまず、冒頭で図に描かれた風景を具体的に述べる。遠くの山や樹木を小さく描き、それを雲霧によってぼかし、遠景と近景、晴れたところと雲霧に煙るところとを書き分けた絵だったのだろう。「春雲は晴を知りて次第に通れ、雲際の春樹は澹くして無ならんと欲す」と、雨上りの雲や水蒸気の動きを巧みに描いている。さらに表現は「南潤 昨夜一簑の雨、萬點の桃花 水を逐ひて徂く、新漲森森遠く草を連ね」と近景の川べりへと移っていく。その風景の中で釣り糸を垂れる人物がしだいにズームアップされていき、さらに描写は、釣り竿や釣り糸へと絞られ、水面下の魚が描き出されていく。釣徒・釣客と称され、清高脱俗の生活者として理想化される画中の人物は魚を得ることが目的で釣り糸を垂れているのではない。したがって、このような絵画に魚が克明に描かれることは、まず無いといつて良い。

ところが、旭莊の「題春川釣魚図」詩は前半部では餌の誘惑に負けた小魚が釣り上げられる様を克明に描くのである。一転して、後半部では都会で名利を求めて奔走する人

物を描く。旭莊は、漁翁の立場で精神の安定を謳歌するという一般的な着想から出発して、途中から発想を逆転させたのである。普通なら、漁翁は遊魚の情を理解するという方向で表現するところを、旭莊の視線は鋭く「釣られる魚」に向けられ、自らの立場を漁翁ではなく魚の側に置いたのだ。恐らく、図に描かれているのは第七句と八句の竿と釣り糸の描写までであろう。

ここから先は旭莊の想像の世界である。釣り糸の下には魚がいる。空想の中の魚は、こと細かに、妙にリアルに描きだされる。餌には目もくれずに悠々と泳ぎ去る大魚、餌の周辺を行ったり来たりする小魚を目のあたりに見るようである。

さらに、次の瞬間には釣り上げられた魚が描かれる。もがき暴れるさま、酷たらしく傷ついた姿、その一瞬一瞬を鮮烈に描きだすことができるのは、旭莊の想像の世界ならではものだろう。長篇古詩に有りがちな故事の羅列による平板さも見せず、テンポよく場面を切り替えていく手法は読者を厭きさせず、四十二句という長さを全く感じさせない。

前半と後半を結ぶ役割を果たす「魚の為には哀れむべきも、釣りは娛しむべし」が巧みである。魚の哀れな最後を写した前半部から、一転して、釣りを娛しんでいた人物の

述懐となる。かつて山中で隠逸的な生活を楽しんでいた時代の回想である。その回想は「釣魚図」中の釣りをする老漁師の生活とも重ね合わされる。やがて読者は、前半で釣り上げられた魚が、後半の人物の比喻だと気付かされるのである。言うまでもなく、この人物は旭莊自身でもある。「吾人」が隠者の如き静かな自適の生活を捨てて、都会へ出て、名利を求めて奔走するさまは、前半部の、餌のまわりをうろつき、結局は自身の自由と尊厳を失う「小魚」の姿と重ね合わされる。後半部の典拠のある句も、自己の文脈に無理なく組み込まれた熟れた表現になっている。

見てきたように、旭莊の当該詩は通常の題画詩とは異なり、画面上に描かれた世界だけを表現しているわけではない。むしろ、画に描かれた部分は詩全体の五分の一足らずで、それをヒントに想像を膨らませた部分の方が、分量としてははるかに多い。すると、実際には「釣魚図」の存在とは全く無縁のところでは詩が出来上がったかのような印象を受けもするが、加藤善庵がこの絵画を見ているのでなければ彼に贈る意味がないだろう。ありきたりの構図の中から想像力を働かせ、故事を駆使した旭莊の真の力量を示すことにならないからである。『瑣事録』の記事をたどれば、初対面の一月二十一日以降、この詩が作られた二月十六日までの間に二人は詩会等で何度か行き来している。その際

に、春川釣魚図について語り合う機会があったのだろう。詩中の「此の圖、戒を寓して炳かなること鑑の如し」「靦顔 紅塵百尺の下、此の春川釣魚図に対す」の表現から、この図を座右の戒めとして大切に扱おうとする意志が読み取れる。とすれば、二月十四日の詩会の折に、善庵が転居したばかりの旭莊に祝いの品として贈ったと想像することもできよう。

#### 四

旭莊は、絵画に描かれた風景の中から「自己の心境」を引き出すという手法を、大阪在住時代の作品「題冬景図」(『詩鈔』第三編の卷一)においても試みているが、こちらは中途半端に終わってしまっている感が否めない。

この「題冬景図」詩は、二十八句の七言古詩で、四句ずつの七段落に分かれる。この作品においても絵画を写す句は、全体の四分の一程度である。冒頭の段落で、図に描かれた水辺の冬景色を細かに描写する。其処に描かれた茅屋と対比させるかたちで、一年中春のような繁華さを追い求める浪華の人々の生活ぶりを述べる。「冬景図」に描かれた田舎のわび住まいに郷愁を感じながらも、その対極にある華美な雑踏の中に身を置く現実、その日常の努力が空虚なものだと感じている自分の心情を表現する段落へと続く。



絵画にことよせて、自己の処世観と儘ならぬ現実を述べた作品である。つまり、図こそ異なるものの、「題春川釣魚図」詩と同一の方法で同一の主題を詠じていることになる。画中の風景→郷愁と共感→それとは反対の現実の暮らし→慷慨、と転換していく。「題冬景図」詩の後半部分は以下のようになっている。

我今方向此中住

儂焉終日慙平素

韓愈光範難上書

杜甫大札空成賦

丈夫

不能唾手取功名

強笑对人若為情

百鍊剛鐵化繞指

甘留窮鬼作友生

寒風北至歲將謝

白雲南飛隔親舍

山中故人招我不

卷圖鶴聲怨遙夜

『詩鈔』の釈五岳の評は「結句叙景、而寓情其中」、巧乎用典である。旭莊は、結句において図中の鶴を叙し、鶴に己れの心情「遙夜を怨む」を寓せんとしたのである。『楚辭』『九辯』の煩悶と慷慨を想起させるために「遙夜」の語を用いたことを五岳も読み取っている。しかし、「九辯」の世界（霜露が草木を枯死させる厳しい季節の中で、君王の視聴に達し得ない怨みと、歳月が忽ち過ぎていく悲しみ）を連想させようとの意図は、直前の句「山中の故人、我を招くや不や」の存在に妨げられてしまった。最

終段落で「冬景図」内の景色に戻ろうとしながらも、これによって、画の世界の外側に身を置くことになり、結句の「鶴」と己れを重ねようとすると、視点が画の内と外とを行ったり来たりして、印象が曖昧になってしまったのである。また、「甘んじて窮鬼を留めて友生と作す」のために、世に認められるべく悪戦苦闘する焦燥感をいう部分の勢いが削がれてしまっている。結局、自らの境遇と図に描かれた鶴を重ね合わせることは失敗したのである。「題春川釣魚図」はこのような欠点もなく纏まっている。場面をきっぱりと切り替えたところがよかったであろう。

## 五

ところで、旭莊は「魚」によって人生の過ちを寓意するが、魚による寓意といえ、すぐに想起されるのは『莊子』であろう。「題春川釣魚図」詩の最後から三句めの「彼此相依互啣嚙」は『莊子』天運篇（あるいは大宗師篇）の泉涸、魚與處於陸、相啣以濕、相濡以沫。不若相忘於江湖。

に基づくものであることは疑いがない。旭莊は「初冬山行」（二編の卷三・天保七年作）においても『莊子』の同じ箇所にもとづく「涸澗相濡魚命窮」の表現を試みている。

「題春川釣魚図」の『莊子』に基づく句「彼此相依互啣嚙」

が次の「紅塵百尺下」に無理なく続くのは、『莊子』は咆  
 濡云々の一文のあとに、「江湖に於いて相忘るるにしかず」  
 （広々とした江湖で相手のことを意識せずに別々に泳ぎ回  
 る境遇にいた方がよい）とするからである。莊子は、助け  
 合うことを否定したのではなく、あえて「苦境」に身を置  
 く生き方を問題としたのである。せせこましい世間で愛情  
 だの親切だのというよりも、それを超越して自適した方が  
 良いというのである。旭莊はこれを的確に読み取って、詩  
 の表現に利用しているわけである。苦しい境遇で互いに助  
 け合う温かい交友と、そうせざるをえない苦しい現実が存  
 在する。魚が咆濡せざるを得ない状況が、人間でいえば紅  
 塵（俗世間）に身を置いて齟齬することなのである。「紅  
 塵」の対極に『莊子』の「江湖」があり、当該詩の後半部  
 の話者がかつて居た「山中」があるのだ。

なお、『莊子』の語句の利用は当該詩以外にもみられる  
 が、興味深いのは『詩鈔』第三編の卷三の大尾にある諸家  
 評語において、劉石舟が

讀「梅墩集」、若遊「王侯園亭」、丹樓畫閣、綺麗眩目、  
 而又有「翳然林水」、自生「濠濮間想」也

としていることである。むろん、この評語は『詩鈔』の三  
 編全体、つまり、旭莊の詩全般に対しての批評であって、  
 必ずしも「題春川釣魚図」詩を意識したものではないのだ

が、劉石舟が「自ら濠濮の間の想を生ず」（俗世間を離れ  
 て隠棲する静かな心）莊子は濠梁で魚の楽しみ遊ぶのを見  
 て楽しみ、また、濮水で魚釣りをして楚の王の招きに応じ  
 なかった）としたのは、日頃、旭莊が『莊子』に傾倒して  
 いたことを念頭においての言葉だったのではないかとも思  
 われる。兄広瀬淡窓は、経学・老莊の学を兼て独得の学風  
 を形成したが、兄のもとで学んだ旭莊もそれを受け継いで  
 いることは言うまでもない。むろん、旭莊の詩に経書に依  
 拠する語句も多く見いだすことができるのは儒学者として  
 は当然のことであるが、『莊子』の理解に相当な自信があっ  
 たように思えるのである。

ところで、もう一つ魚を用いた寓意で忘れてはならない  
 のが、古楽府「枯魚過河泣」である。

枯魚過河泣 何時悔復及

作書與魴鱖 相教慎出入

釣られた後で悔やんでも仕方がない、行動を慎めというの  
 が主題である。運ばれる途中の枯魚（干し魚）が河（かつ  
 て自由に泳ぎ回った場所）の傍を通過する時に、後悔して  
 泣き、友人の魴鱖に手紙を書いてその進退を戒める、とい  
 うものである。李白にもこれに基づく楽府詩がある。

枯魚過河泣

白龍改常服 偶被予且制

誰使爾為魚 徒勞訴天帝

作書報鯨鯢 勿恃風濤勢

濤落歸泥沙 翻遭螻蟻噬

萬乘慎出入 柏人以為誠

設定を細かくしただけで主題は全く同じである。李白の作は、天帝の使者である白龍が清冷の淵に降って魚に化けて泳いだ時に、予且という漁師に目を射られてしまつて、天帝に訴えたところ逆に自分の不注意を咎められたという話（『説苑』正諫）に基づく。伍子胥が呉王を諫める場面の寓話で、貴人の微行して危険な目に遇う喩としてしばしば使用される。張衡の「東京賦」（白龍魚服、見困予且）、潘岳「西征賦」（彼白龍魚服、挂予且之密網）、李白「留別曾南群官之江南」（我昔釣白龍）など用例は少なくない。

ことに、李白が「誰使爾為魚」（誰かがお前を魚にしたわけではなく、みずから魚に化したのだ）とするあたりが、旭莊の当該詩の「一念自ら誤りて人の註くにあらず、遠く小園を去り大都に客す。利餌、名鉤、世波の際。知らず、我が身化して魚と為るを」に通じるだろう。

付言すれば、李白の樂府詩の後半は、『莊子』雜篇の「庚桑楚」にみえる「吞舟之魚、碭而失水、則蟻能苦之」（舟を呑む程の大魚でも、はね上がって陸にいれば、小さ

な蟻に食われて苦しめられる）を踏まえたものである。また、同じ『莊子』雜篇の「外物」の轍鮒の寓話では、水がなくなつて瀕死の鮒が助けを求めた相手に、用事を済ませて帰るまで待てと言われて腹を立てて「曾不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>早索<sub>一</sub>我於枯魚之肆」（その時にはいつそのこと、乾物屋の店先で私をさがした方がいいでしょう）と言う。「枯魚過河泣」の古樂府の成立自体が『莊子』と関わりをもつものかもしれない。「外物」には、神龜を得た漁者余且なるものも登場するのである。

他人の詩句でも一度読んだら忘れないと自ら語る博覽強記の旭莊が作った詩は、発想のもととなった作品が何であるかを特定することは難しい。『詩鈔』の作品をみると、旭莊は同じ表現を繰り返して使用するが、二度目、三度目に用いられた語句は、最初の表現とは全く様相を異にする場合も多い。「題春川釣魚」詩自体は僅かの日数で作られたようであるが、詩中の個々の語句はどれも時間をかけて練り上げられたものである。旭莊の詩囊は常にこのような語句で満たされており、それらを繋ぎ合わせて新しい句を構成するのが彼の手腕なのである。

題画詩のかたちをとりながら、当該古詩の主題は作者の内面からもたらされたものである。とはいえ、そこに表現されているのは心の真実であると同時に文学的ポーズでも

あることを忘れてはならない。したがって、これを作者の人生観そのものだとして受け取ることは誤りであるが、作者の人生と全く切り離して鑑賞することも、この詩の理解には十分ではない。この詩を賦した天保十五年春の旭莊は、江戸に腰を落ち着ける決意をして分不相応ともいえる屋敷を構えたばかりである。それが仕官のことを念頭においた行動らしいことは最初に述べたとおりである。この詩を賦した数日前、旭莊は桜の苗木を何本も買い込んで屋敷の庭に植え、後日、友人を招いて花見をしている。多少の不安を抱えていたとはいえ、決して失意の中に居たわけではないのである。

文人画と漢詩は全盛期を過ぎたとはいえ、漢学者、医師、或いは文墨を愛好する武士や富裕な商人らは「詩」「書」「画」を媒介として身分を越えて広く交遊していたのである。「詩」「書」「画」の総合芸術といわれる文人画は、知識階級の余技という建て前をもっていた。したがって、これを嗜むことは高度な精神性の追求を標榜することにもつながったのである。旭莊との交際を求める人々は旭莊が「文人」であることを期待した。このため、旭莊も必然的に画を嗜む人々とも交際することになり、絵画についての見識も求められた。山水画に触れる機会が多くなったことによって旭莊の詩の領域も広がったのである。

なお、当時の学者の多くは依頼されて書幅に揮毫し、山水画に画賛を書いて幾許かの謝礼を得て生活の資の一部とした。<sup>〔詳註〕</sup>旭莊も例外ではなかった。しかし、「文人」という便利な隠れ蓑を着てはいても、やはり心のどこかで「漢学者」として認められることを望んでいた旭莊は、依頼されて詩を揮毫する際には「餘事作詩人」の関防印を使用している。このようなところにも理想と現実の狭間で抵抗する旭莊の姿を窺い知ることができる。

『詩鈔』の絶句の中には、題画詩ではないかと疑われるような作品が幾つも存在するが、全九巻のうちで題画詩であることを明記しているのは二十首ほどである。題画詩や画賛を書くことが、在野の学者の重要な社交手段であり、且つ収入源であったという事情から推察すれば、実際にはさらに多数の画賛やそれに近い形態の詩を作っていたものと思われる。旭莊は『詩鈔』を編纂する際に、贈答詩の多くを切り捨ててしまっているが、同様の運命を辿った題画詩も少なくなかったと想像されるのである。

## 【通 釈】

春雲は晴天を知って逃げるように次第に移動して行く。山上の春樹は雲霧に遮られて色淡く、消えてしまいうだ。南の谷川には昨夜少なからず雨が降ったのだ。

満開の桃花は散つて水に浮かんで流れて行く。  
漲ぎる桃花水は渺々と流れ、川に沿って遠くまで草の緑が連なる。

その川の中には老漁師を載せた小舟がうかぶ。

長い竿はたおやかに撓つて微風が触れたかのように、釣り糸は揺いで引つ張られ、縮んで又伸びる。

大魚は仕掛けを見ると決然として去ってしまったが、小魚は餌を見て忽ち躊躇する。

初めのうちは疑つて近づこうとしないが、終には我慢しきれず餌に食らい付く。

とたんに、魚の尾は水面から三四寸ばかり離れ、頭を振つてもがき、釣り上げられながら身を躍らせる。鉤は喉に刺さつて今さら悔いても意味がない。

口にはなお餌を含んだままだが、身は已に死んでいる。そこなわれた鱗は浪に漂つて、もとの美しい姿も無く、遺された魂は藻に引つ掛かつて奄り、蘇ることはない。

嗚呼、前の魚がこうなったのは仕方がないが、後の魚も餌を欲して又そこへ行くのだ。

此の図の寓意は明鏡のようにはつきりしている。

魚の為には哀れむべきだが、君子は釣りを娛しむのがよい。私はもと山中に身を寄せていた。

谷川に面した数椽の小さな竹屋に住んでおり、

周囲の一邱一壑すべてが心に適った場所であった。  
家から出るときは釣り竿を手にし、家の中では書物を手にする自適の日々。

ひとたび思い立ったのは自らの過ちで、他人が欺いてそうさせたわけではないが、

住み慣れた小園を去つて都会に客居することとなった。

利の餌、名の鉤のあるところ、俗世の波打ち際に暮らし、我身が化して魚同様となったことも気付かなかったのだ。

物価高の都会の生活に、債務は膨れ上がつて新居は貧しく、かつての仲間とも敵対関係を生じ、交友も疎遠になる。

朝早くから諸侯の邸宅に出掛けて権勢におもねり、日が暮れてから帰宅して燈下で独り長嘆息する日々。

たとえば、仕官のために仲介の労をとってくれる人がいても己の才が拙く、謀り事に疎いのをどうすることができよう。

現在、一二の新しい知人がおり、私と共に詩を作り酒を飲んで詩社を結成した。

牛馬の蹄跡にできた水溜まりにいる魚、その水も涸れそうな状態に似ている今、

彼等と私は互に寄りそい助け合つて俗世間で齟齬している。恥を感じながらも、結局は煩わしい俗世間での生活。

せめて此の春川釣魚図に向かつて己れの戒めとしよう。

【注1】 羽倉簡堂 父秘救が西国郡代として日田に赴任したのに

従って西遊し、広瀬淡窓らと交わった。天保改革時に水野忠邦に抜擢されて勘定吟味役となり功績をあげた。淡窓が名字帯刀を許されたのは、簡堂の推挽によるという。しかし、旭荘が江戸へ出て間もない天保十四年閏九月、水野忠邦と共に失脚。

【注2】 鈴木瑞枝「江戸滞在中の廣瀬旭荘について」（『安田学園研究紀要』25 一九八五年三月）

【注3】 『瑣事録』の表記は「濱街久松坊」。同書によれば、山川検校の屋敷（建物のみ）を金八十両で購入した。敷地は旗本吉野氏の所有で、借地料は年十両の契約であった。

【注4】 二月十八日 柳橋善庵別號題 絶句余春川釣魚詩後 贈余

【注5】 鈴木春山 三河国田原藩医鈴木玄通の長男。蘭方医。長崎に遊学して医術を学んだ際、日田に立ち寄り咸宜園に滞在した。旭荘が江戸へ出てからは何くれとなく相談にのり、また、旭荘が体調を崩すと診察や調薬をこまめにしていたことが『瑣事録』にみえるが、医学よりも漢学や兵法に興味をもった俠気的人物らしい。旭荘は春山の死を知った日、『瑣事録』（弘化三年閏五月十一日条）に九十五行に互って、彼の人となりや逸話を記して、その死を悼んでいる。

【注6】 一月二十日 春山来日、君隣坊加藤善庵者欲請君、某介明日請臨

【注7】 二月十四日 午後赴加藤善庵詩會 先是余與善庵約 毎月十四日二十九日開詩會

【注8】 十便十宜図の一。池大雅の作が有名であるが、十時梅涯

や中林竹洞にもこれに学んだ釣便図がある。

【注9】 旭荘は『東遊稿』中の七言古詩「放魚行」（『詩鈔』には収載しない）において魚の死骸を克明に描写している。

【注10】 「題稻垣木公文稿」（三編の卷一・天保十年作）、「除夜祭詩」（三編の卷三・弘化二年作）など。

【注11】 京都の頼山陽なども生活の資とするために、地方へ出向いて揮毫をおこなっている。